【論文】

留学生による出前授業の教育的有用性の検討

――東松山市きらめき市民大学における取り組みを事例に――

田渕敬光*

キーワード：留学生、出前授業、きらめき市民大学、教育的有用性

１．はじめに

高等教育課程で学ぶ留学生と地域とのかかわりについては、木谷・高岸（2019）、シンプソン（2020）などで報告されているように、自然発生的なものだけでなく、各教育機関が独自のプログラムにより留学生が地域に適応し溶け込む、あるいは地域住民からの理解を促すような取り組みが行われている。このような教育機関主導による取り組みの必要性は、岸田（2022）の2019年度に行われた全国調査の報告からも伺える。当該調査によって、留学生自身の地域に対する意識が明らかになっているが、そのなかで、「日本人や日本社会との接点は思ったより少なかった」という項目で回答者662人中、482人（72.8％）が「よくあてはまる」または「ややあてはまる」を選択している点に注目したい。当該調査によれば、多くの留学生の地域や地域住民とのかかわりの機会は留学生の想定より少なかったのである。彼・彼女らの考える地域・地域住民とのかかわり方を実現させるためには、地域連携の基盤を担う教育機関の主導による機会創出が必要不可欠であろう。

なお、教育機関が主導して留学生と地域や地域住民との接触を促す場合、ただ闇雲に交流の機会や場を提供し続けるだけでなく、このような取り組みが地域や留学生にどのような効果をもたらすのかについても考慮しておく必要がある。例えば、村越（2020）の、城西短期大学ビジネス総合学科の科目である「日本文化研修」における小川町にぎわい創出課との連携についての報告で、地域とのかかわりが一定の教育的効果をもたらすことが明らかとなっている。また、木谷（2019）は、高大連携や地域貢献を狙いとして行った留学生と高校生による共同学習の場で、留学生が自国の事情について紹介することで、高校生側はこれまで持っていたイメージが変わり、「国際交流」に対する意識変化につながったとし、留学生自身も当該授業が留学生活の中でも重要な経験となったとしている。

ただし、これらの報告ではいずれも、地域や地域住民とのかかわりを経たことで具体的に留学生にどのような成長をもたらしたかについては言及していない。したがって、本稿では、留学生が講師役となって行う出前授業を事例として、留学生と地域住民との接触やそのための準備を通して、留学生のどのような能力が成長したのかを明らかにする。さらに、本稿における取り組み（出前授業）と留学生がそれまで体験してきた地域や地域住民との関わりとの比較も加えて、本稿の取り組みの教育的な有用性を検討することとする。

＊　城西短期大学・准教授

２．出前授業実施の背景と狙い

本学ビジネス総合学科では、2023年度に入学した留学生は２名で、２名ともベトナム出身であった。筆者は、彼ら１年生の日本語の必修科目を担当しており、日本語による文章作法や発表、ディスカッションなどを行っている。その中で、近年、ベトナム人に対する印象の悪化が自身らにも悪影響を及ぼしているとの主張があった。その事例として、当該留学生がアルバイトの採用面接において、自身がベトナム人であることを明かした途端、それまで穏やかだった雰囲気が一変し、不採用となってしまったといったことがあったようである。ベトナム人だからという理由で不採用となったか否かは定かではないが、少なくとも、ベトナム人であることを明かしたことで自身の印象が悪くなってしまったと留学生自身は感じているようである。このように、彼らは一部のベトナム人により全体に対する印象が悪化していることを憂えており、ベトナム人全体に対する負のイメージを払拭する機会がないものかという訴えがあったのである。

以上のような経緯から、本稿のテーマである留学生自身が講師役となって、自国についてのイメージを改善させ、さらに主体的な学びや日本語能力の向上につながるような出前授業ができないかと考えた。幸いにも筆者がメンバーとして関わる東武東上線沿線大学プラットフォーム（TJUP）の加盟校である東京電機大学職員の杉山成二氏より、東松山市きらめき市民大学（以下、きらめき市民大学）において留学生が自国についての紹介をしたという事例を聞き及んでいたため、早速、杉山氏を介してきらめき市民大学に留学生による出前授業の実施を打診した。後日、きらめき市民大学事務局長小関一史氏より回答があり、「国際・文化」学部において2023年10月18日（水）に実施することで承諾を得た[1]。

この出前授業を実施するにあたっての狙いは、留学生の立場からは、地域住民に「自国に対する理解の深化と良化」を、また、筆者の教員としての立場からは、前項で述べたように教育的効果を期待して実施するものである。具体的には、準備段階および出前授業実施を通して留学生が「日本語能力の向上」、「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力[2]（基本的学習成果）の獲得・向上」といった成果を獲得することを狙いとしている。

３．出前授業実施に向けた準備

2023年５月16日にきらめき市民大学の担当者より内諾を得た後、春学期６回目の授業日である５月17日（水）より出前授業実施に向けた準備を開始した。大まかな準備のプロセスは表３．１のとおり

1　きらめき市民大学に本件を打診した時点で、既に2023年度の授業開始から４週ほど経っていたが、次の学期以降での実施が可能とのことであった。準備期間等も考慮し、きらめき市民大学が２学期に入り、本学でも秋学期が始まって数週経ってからの実施が望ましかったため10月18日（水）を候補日として伝え、快諾を得た。

2　本学ビジネス総合学科では、ディプロマポリシー（2023.4入学者用）において、①前に踏み出す力、②考える力、③協力する力を「基本的学習成果」として定めており、これに加えて、「専門的学習成果」である④職業人として活躍できる幅広い教養、⑤ビジネススキルを身につけた者に学位を授与するとしている。

である。

表３．１　出前授業実施までの準備過程

学期	回数	日付	準備項目
春学期	1	５月17日	実施要件・環境について確認
	2	５月24日	実施内容の検討
	3	５月31日	内容の確定、情報収集開始（各自teamsに蓄積）
	4	６月７日	情報収集（各自teamsに蓄積）
	5	６月14日	情報の整理、まとめ作業、スライド作成開始（teams共同作業）
	6	６月21日	スライド作成（teams共同作業）
	7	６月28日	スライド作成（teams共同作業）
	8	７月５日	スライド作成（teams共同作業）
夏休み			各自資料収集、PPT作成
秋学期	9	９月27日	スライド最終確認（teams共同作業）、読み上げ原稿作成
	10	10月４日	読み上げ原稿完成、練習
	11	10月11日	練習
		10月18日	出前授業実施

初回準備日に、先方の１コマ分の時間（90分）を頂いていること、間10分の休憩があることなどの要件を確認し、PC・プロジェクター・スクリーン・マイク等を使用することなど、実施環境についても留学生らとともに整理した。

３回目の準備段階で、出前授業で扱う内容を「ベトナムの社会」、「日越関係」、「ベトナムの文化」の紹介（講義型）と「ベトナムの遊び」の実践（体験型）に確定した。その後、内容毎に担当者を決め、各々の担当する内容に関する情報を収集させた。収集した情報については、Microsoft　teams（以下、teams）でチームを作成し、同チーム内のClass　Notebookに蓄積させた。なお、teamsでの共同作業にあたっては、PCによる作業が必須であったが、ノートPCを持っていない学生がいたため、情報科学研究センターの貸出しノートPCロッカーを利用させ、毎回の授業（準備）において事前に借りてくるよう指示していた[3]。共同作業中は、筆者が日本語の間違いや深堀りすべき情報等を都度指摘し、作業が円滑に進むよう促した。

3　情報科学研究センターのPC貸出し用ロッカーは、学生証を端末にかざすだけで出し入れができ、煩雑な手続きが必要ないため、日本語やコミュニケーションに自信のない学生でも気軽に借りられるようになっている。

図３．１　Class Notebookに蓄積した情報

５回目の準備段階で、それまでに収集・蓄積した情報を図３．１のようにまとめ、これをもとにPowerPoint（以下、PPT）資料の作成を開始した。PPT資料の作成にあたっては、自身が担当する各パートを各自個別に作成するのではなく、teams内で同一ファイルを開くことによるリアルタイム共同作業で進行した。筆者も資料作成の進捗を俯瞰的に把握しながら日本語チェック等を同時に行った。毎回、作業の終わりには日本語科目（文章作法・口頭表現）の時間を使って準備を行っていたこともあり、進捗や今後の予定を口頭で報告・確認させた。また、作業中に情報の取捨選択や使用する表現等が悩ましい場合には、２名の作業を中断させ、留学生同士で議論させながら日本語による合意形成を促し、使用する表現等を決めさせた。

図３．２　事前準備の様子

当初、春学期中に資料作成作業が完了する予定だったが終わらなかったため、夏休み中にも各自で不足している情報の収集と資料作成を続けることとなった。

秋学期に入り初回の授業で漸く使用するPPT資料が完成し、出来上がったスライドは全49枚、表紙や目次等を除いた内容部分が43枚（「ベトナムの社会」10枚、「日越関係」８枚、「ベトナムの文化」25枚）といったものとなった。次に完成したPPT資料を基に読み上げ原稿を作成したのだが、先述したように、当初の予定より資料作成に時間がかかってしまったため、読み上げ原稿の完成と練習ができたのは出前授業実施の前週であった。

４．出前授業の実施

前項のような事前準備を経て、出前授業を2023年10月18日（水）に予定通り実施した。当日の受講者数は26名であった。

当初は、持ち時間90分（うち休憩時間10分）のなかで50分程度を「ベトナムの紹介」に充てる予定であったが、実際に授業を始めると、講師役の２名がともに緊張し、やや早口で話してしまったため、40分程度で紹介が終わった。

その後、質疑応答の時間を10分ほど設けた。その際に出た質問としては、「日本での留学生活で困ったことや母国との違いはあるか」、「ベトナムにおけるアルファベットの読み方」、「学生の着るアオザイについてもう少し詳しく教えてほしい」、「ベトナムでは英語をよく使うのか」、「ベトナム人は結婚後に親と同居することが多いのか」、「ベトナムの病院などで、お金を多く払うことで対応が変わることはあるか」、「ベトナムでは地域によって性格の違いなどはあるか」などといったものがあった。

図４．１　「ベトナムの紹介」・「質疑応答」の様子

その後、10分の休憩を挟み、ベトナムの遊びである「バウクア（Bầu　Cua）」を１グループ５～６名ずつに分かれて体験してもらった。「バウクア（Bầu Cua）」は、日本のチンチロや丁半博打に似た卓上ゲームである。高齢者にとって、馴染みのある遊びに似ており、ルールもそれほど難しくない。そのため、ルールの説明にほとんど時間を要さず、すぐに始めることができ、また、非常に盛り上がった。留学生らも一緒に参加するものと思われたが、２名とも親役の受講者がスムーズにゲーム進行ができるようサポートに徹していた。

図４．２　バウクア体験の様子

５．受講者の反応

授業終了時に受講者に対してアンケート調査を実施した（表５．１）。アンケートの回答者は当日の受講者26名のうち19名（73.1％）であった。

なお、設問３－３から回答者数が14名となっているが、これは３－３から５までの設問がアンケート用紙の裏面に記載されていたため、設問の存在に気付かなかったものと思われる。また、３－４のみ11名となっているが、「内容（情報）に知りたくないものがあった。」という設問の意図が受講者にとって不明瞭であったためであろう。なお、この設問は、講義内容で日越関係における日本のベトナム占領期やその後のベトナム戦争について等、センシティブなものも扱っているため、これらに対して嫌悪感を抱く受講者がいたかどうかを明らかにし、今後同様の機会があった際に当該内容を取り入れるべきか否かを検討する材料とする狙いがある。

表５．１　受講者アンケート集計結果

※４．そう思う　３．ややそう思う　２．あまりそう思わない　１．そう思わない

設問	回答者数（％）				
	4	3	2	1	計
１－１．学生の話すスピードは適切だった	10(52.6％)	8(42.1％)	1(5.3％)	0(0.0％)	19
１－２．学生の声の大きさは適切だった	7(36.8％)	10(52.6％)	2(10.5％)	0(0.0％)	19
１－３．学生の発音は適切だった	9(47.4％)	8(42.1％)	2(10.5％)	0(0.0％)	19
１－４．学生の使う語彙は適切だった	9(47.4％)	9(47.4％)	1(5.3％)	0(0.0％)	19
２－１．スクリーンに映し出した資料や配布資料は見やすかった。	15(78.9％)	4(21.1％)	0(0.0％)	0(0.0％)	19
２－２．話している内容と資料の内容が合っていた。	16(84.2％)	3(15.8％)	0(0.0％)	0(0.0％)	19
２－３．資料の分量やバランスは適切だった。	10(52.6％)	7(36.8％)	2(10.5％)	0(0.0％)	19
３－１．内容（情報）は分かりやすかった。	14(73.7％)	5(26.3％)	0(0.0％)	0(0.0％)	19
３－２．内容（情報）の量は適切だった。	12(63.2％)	6(31.6％)	1(5.3％)	0(0.0％)	19
３－３．内容（情報）に知りたかったものがあった。	5(35.7％)	8(57.1％)	1(7.1％)	0(0.0％)	14
３－４．内容（情報）に知りたくないものがあった。	1(9.1％)	2(18.2％)	3(27.3％)	5(45.5％)	11

３－５．ベトナムの社会について理解が深まった。	5(35.7%)	9(64.3%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
３－６．ベトナムと日本の関係について理解が深まった。	5(35.7%)	8(57.1%)	1(7.1%)	0(0.0%)	14
３－７．ベトナムの文化について理解が深まった。	6(42.9%)	8(57.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
４－１．質問に丁寧に答えてくれた。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
４－２．この授業に満足している。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
４－３．授業を受けてベトナムに対する印象が良くなった。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14
４－４．授業を受けてベトナム人に対する印象が良くなった。	9(64.3%)	5(35.7%)	0(0.0%)	0(0.0%)	14

５．自由記述欄

・未知の国だったのでとても楽しくお話をきけた　これからもこんな授業がほしい

・バウクアとても楽しかったです。

・ベトナムの音楽、楽器を奏でてほしかったです！

・国際交流協会でぜひ在東松山ベトナム人の友人達を支援して下さい。

・たのしかったです！

アンケート項目は「１．学生の話の聞き取りやすさについて」、「２．授業で使用した資料について」、「３．授業の内容について」、「４．その他」、「５．自由記述欄」といった構成となっている。それぞれ、日本語運用能力、授業準備、内容、効果等を振り返るための項目である。

日本語運用能力については、話のスピード（１－１）・声量（１－２）・発音（１－３）・語彙（１－４）がやや不適切だったとする意見が１～２名からあがっているが、概ね良好であったとの評価を得ている[4]。なお、声量に対する評価がほかの３項目に比べてやや低いが、これは、授業の前半（スライド発表部分）でマイクを使用しておらず、後部に座っていた受講者が講師役２名の声を聞き取りづらかったためであろう。なお、発音や語彙については、筆者が聞いている限りでは、言い間違いなどのミスがあり、話の趣旨が上手く伝わらなかったであろう場面が何度かあった。

授業準備に関しては、見やすさ（２－１）、話と資料の整合性（２－２）は高評価であったが、分量やバランス（２－３）に関してはやや不適切だったとする意見があるなど、見やすさや整合性と比べると評価が高くなかった。今回の授業で使用したスライドは、前項でも示したように「ベトナムの社会」が10枚、「日越関係」が８枚、「ベトナムの文化」が25枚と、たしかにベトナムの文化に偏重していると捉えられかねないバランスであった。今後、同様の機会があった際には資料準備にあたり、この点を考慮して作成すべきであろう。

次の「３．授業の内容について」は、情報の分かりやすさ（３－１）については、評価が高かったが、情報量（３－２）は、１名からやや不適切であったとする回答があった。また、情報に対する関心度をみる項目として、知りたかったものがあった（３－３）、知りたくないものがあった（３－４）を設けているが、先述したように特に「知りたくないものがあった」については意図が伝わっていなかったことから回答が割れてしまったようである。一方で、留学生の狙いの１つである「自国に

4　授業開始前に、講師役が短期大学１年生であること、日本語能力がまだ十分でないことなどを受講者に伝えていたため、評価が甘くなった可能性がある。

対する理解の深化」についての項（３－５～３－７）は、概ね悪くはないが、突出して高いわけでもない。また、日越関係（３－６）では、やや不適切とする意見が１名あった。情報量（３－２）に比べ、これら３項目の評価がやや低いことから、情報の量の問題ではなく質の問題と考えられる。

４つ目の項目は質問への対応や受講者の満足度、ベトナム（人）に対するイメージの良化についての設問である。各設問の方向性は全く違うが、結果はすべて同じで、回答者の半数以上が「そう思う」、４割弱が「ややそう思う」と答えており、ネガティブな回答はなかった。したがって、留学生側の狙いである「自国（人）に対するイメージの良化」（４－３、４－４）については、ある程度達成されたものと考えられる。

以上、受講者による評価については、概ね良好であったようである。また、最後の自由記述欄のコメントは、「未知の国だったのでとても楽しくお話をきけた　これからもこんな授業がほしい」、「バウクアとても楽しかったです。」、「ベトナムの音楽、楽器を奏でてほしかったです！」、「国際交流協会でぜひ在東松山ベトナム人の友人達を支援して下さい。」、「たのしかったです！」といったもので、否定的なコメントはみられなかった。ただ、ベトナムの楽器の演奏が実演できなかったことに対する指摘は、今後の課題として留意しておくべきであろう。

以上のように受講者（アンケート回答者）からの評価は、高かったようであるが、講師役となった留学生の自己評価についてはどうだろうか。

６．留学生による評価

ここでは、留学生自身が出前授業の準備や実施に対してどのような自己評価をしているのかを明らかにする。

受講者と同様に、講師役の留学生２名に対しても出前授業終了後にアンケートを行った（表６．１）。質問項目は受講者のものと同じものも一部あるが、主として出前授業を通した自身の成長などを問うている。具体的には、表６．１のように、「１．自分の取り組みについて（準備段階）」、「２．自分の取り組みについて（出前授業当日）」、「３．出前授業に対する受講者の評価について」、「４．自身の成長について（日本語能力以外）」、「５．自身の成長について（日本語能力）」、「６．自由記述欄」といった構成になっている。

表６．１　講師役留学生アンケート集計結果

※４．そう思う　３．ややそう思う　２．あまりそう思わない　１．そう思わない

設問	回答者数			
	4	3	2	1
１－１．話す内容を決めるときに自分の意見を言えた。	2	0	0	0
１－２．自分が担当した部分の調査はよくできた。	0	2	0	0
１－３．自分が担当した部分のPPTはよくできた。	0	2	0	0
１－４．PPT全体はよくできた。	1	1	0	0
１－５．自分が担当した部分の情報量はちょうど良かった。	1	1	0	0

１－６．PPT全体の情報量はちょうど良かった。	1	1	0	0
１－７．PPT全体の情報のバランスはちょうど良かった。	1	1	0	0
２－１．自分の話すスピードは適切だった。	0	2	0	0
２－２．自分の声の大きさは適切だった。	0	2	0	0
２－３．自分の発音は適切だった。	0	2	0	0
２－４．自分が使った語彙（ことば）は適切だった。	0	2	0	0
３－１．受講者はベトナムの社会について理解が深まったと思う。	0	2	0	0
３－２．受講者はベトナムと日本の関係について理解が深まったと思う。	0	2	0	0
３－３．受講者はベトナムの文化について理解が深まったと思う。	0	2	0	0
３－４．受講者は出前授業に満足していると思う。	2	0	0	0
３－５．受講者は出前授業を受けてベトナムに対する印象が良くなったと思う。	0	2	0	0
３－６．受講者は出前授業を受けてベトナム人に対する印象が良くなったと思う。	0	2	0	0
４－１．以前より「前に踏み出す力（主体性、働きかけ力、実行力）」が成長した。	0	2	0	0
４－２．以前より「考える力（課題発見力、計画力、創造力）」が成長した。	1	1	0	0
４－３．以前より「協力する力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性）」が成長した。	1	1	0	0
４－４．その他に日本語能力以外で成長したと感じるものがあれば以下に記入してください。 ・お年よりと一緒に話して、よくコミュニケーションしたことでたくさんの単語を学ぶことができて、よかった。 ・コミュニケーション力が成長した				
５－１．以前より「読む力」が成長した。	1	1	0	0
５－２．以前より「聞く力」が成長した。	0	2	0	0
５－３．以前より「話す力」が成長した。	0	2	0	0
５－４．以前より「書く力」が成長した。	0	2	0	0
５－５．以前より「会話力」が成長した。	0	2	0	0
５－６．以前より「語彙力」が成長した。	2	0	0	0
５－７．その他に日本語能力で成長したと感じるものがあれば以下に記入してください。 ・紹介の時に間違ったことばがあったことに気付いた。そのあと、会話しながら、そのことばを自分で直すことができた。				
６．　出前授業に関する意見や感想があれば以下に記入してください。 ・初めてお年寄りと話せて、ベトナムのことをみんなに紹介でき、ベトナムの印象がよくなってよかったと思う。				

２名の回答をみてみると、PPTに関するものや日本語以外の能力の成長に関して多少の違いがある程度で、ほとんどの項目で差異はなかった。

準備段階の評価をみると、自身の担当した調査やPPTに対する評価はそれほど高くなかったようである。また、情報量やバランスについては見解が分かれており、１名はやや評価が低い。受講者からの評価にもあったが、スライドの枚数だけをみても、「文化」のパートに偏重していると捉えられ

かねないバランスであった。

出前授業当日の自己評価は、２名ともスピード（２－１）、声量（２－２）、発音（２－３）、語彙（２－４）すべてで評価がそれほど高くなかった。なお、これらの評価は、受講者によるものに比べ、留学生自身のもののほうが低い結果となっている。

次に、出前授業に対する受講者の評価がどうだったと思うか、という設問であるが、これも、前項と同様にやや控えめな回答がほとんどであった。しかし、受講者の満足度（３－４）についてのみ、２名とも「４．そう思う」と答えており、留学生自身も手ごたえを感じているようである。ただ、今回の取り組みの留学生側の狙いであった「自国（ベトナム）に対する理解の深化と良化」の達成は、「３．ややそう思う」という回答から、十分に成しえていないと考えていることが伺える。

一方で、筆者の狙いであった「日本語能力の向上」、「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力（基本的学習成果）の獲得・向上」については、「４．自身の成長について（日本語能力以外）」および「５．自身の成長について（日本語能力）」で問うている。

ディプロマポリシーに定める能力については、前に踏み出す力（４－１）が２名とも「３．ややそう思う」という控えめな評価であったのに対して、考える力（４－２）、協力する力（４－３）については１名が「４．そう思う」、もう１名が「ややそう思う」と答えており、１名は自身の成長を強く感じているようである。具体的に、何がきっかけでこのような回答となったのかを明らかにしたいところではあるが、本アンケートは留学生２名に対して匿名性を保障することを条件に回答させているため、本稿ではこれ以上の言及は控えることとする。

また、自由記述欄（４－４）には、「お年よりと一緒に話して、よくコミュニケーションしたことでたくさんの単語を学ぶことができて、よかった。」、「コミュニケーション力が成長した」との記載があり、前者は日本語能力（語彙）についての言及であるため、この欄の趣旨とは外れているが、２名ともコミュニケーションというキーワードで一致している。日本人とのコミュニケーションによって自身の成長を強く感じたものと思われる。

日本語能力についても、概ねある程度の成長を感じているようである。具体的には、聞く力（５－２）、話す力（５－３）、書く力（５－４）、会話力（５－５）の成長に関してはそれほど高いものではないが、読む力（５－１）や語彙力（５－６）に関しては高い成長を感じているようである。日本語能力に関する自由記述欄（５－７）をみると、「紹介の時に間違ったことばがあったことに気付いた。そのあと、会話しながら、そのことばを自分で直すことができた。」との記載があり、自身の日本語の誤りを正す力の成長を感じているようである。

以上のように、アンケートの結果を見る限り、本取り組みにおける筆者の狙いである「日本語能力の向上」と「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力（基本的学習成果）の獲得・向上」については、ある程度の成果があったことが分かる。

また、出前授業に対する自由記述欄（６）には、「初めてお年寄りと話せて、ベトナムのことをみんなに紹介でき、ベトナムの印象がよくなってよかったと思う。」との回答があった。アンケート結果の端々から留学生の自信のなさが伺えるが、その一方で、「２．あまりそう思わない」や「１．そう思わない」と回答した項目がない点や最後の自由記述欄（６）から、総じて今回の取り組みに対する自己評価や満足度は高く、手ごたえもある程度あったものと思われる。

７．留学生による出前授業の教育的効果

アンケートとは別に過去の地域や地域住民との交流との比較などについてのインタビューも行った。インタビュー内容は、「①過去の日本人・地域との交流の機会の有無とその内容」、「②過去の交流と今回の取り組みとの違い」、「③今回の取り組みでどのような点が自身の成長につながったと思うか」、「④今回の取り組みの中でどのような能力が最も成長したと思うか」、「⑤他の留学生も今回の取り組みのようなことをすべきだと思うか、その理由は何か」という構成である。

２名とも①はあると答えたが、学校などが主導したものではなく、アルバイト先や友人関係など個人的な接触のみしか経験がないとのことだった。また、②の過去の日本人との交流と今回の取り組みとの違いについては、「これまでは交流の相手が若者だったが、今回はお年寄りだったから、感覚の違いなどを感じた。しかし、若者との交流よりお年寄りとの交流のほうが使う言葉がわかりやすく、コミュニケーションを取りやすかった。」、「これまでは、交流の場で敬語などを意識してこなかったが、出前授業では丁寧語をしっかり使うよう意識した。」と答えている。留学生と日本人との交流においては、同世代の若者同士のほうがスムーズであると思われがちであるが、同世代の若者の言葉遣いに戸惑ったという訴えは、筆者がこれまで指導してきた留学生からも一定数あった。一方で、高齢者との会話は、その豊富な経験からか、留学生にとって理解しやすい言葉遣いをする上に、留学生の発話を誘引する話術にも優れていることが多いと思われる。さらに、後者の回答のように、相手が年長者であることから、留学生自身も丁寧な言葉遣いを心がけようとする効果も期待できるのである。

③今回の取り組みでどのような点が自身の成長につながったと思うかについては、「交流の時間が短かったため、実施の段階での具体的な成長はあまり感じていないが、準備を通して、ベトナムについて深く理解できるようになった。」、「ベトナムの歴史を調べることによって深く理解できた。ベトナムの文化もよく理解できるようになった。」との回答があった。やや質問の趣旨から逸れた回答であったが、２名とも準備期間を通して自国についての理解が深まったようである。実際に、準備段階では特に「ベトナムの社会」、「日越関係」の部分で調査が難航した。当該部分を担当した留学生は、これまで、自国の政治や経済、外交について全く興味を持たずに過ごしてきたため、当該部分の内容のほとんどは、今回の準備（調査）の際に初めて知ったことだと述べていた。その国の人間であれば誰しもがその国について精通しているというわけではないのだが、留学先で自国の紹介をするという機会は存外多い。この２名も今後、自国の紹介をする機会が再度訪れるであろう。その際に、今回の経験を通じて、少なくとも自国の社会や日越関係、自国文化については円滑にその魅力の一端を伝えられるようになったものと思われる。

④今回の取り組みの中でどのような能力が最も成長したと思うかという質問については、２名とも「PPT作成技術が向上した」との返事があった。この「PPT作成技術」は、本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める、専門的学習成果に該当するものであり、本取り組みにおける当初の狙い以上の成果を得たことになる[5]。

⑤他の留学生も今回の取り組みのようなことをすべきだと思うか、その理由は何かという質問については、２名ともすべきだと答え、その理由として「日本にいても日本人と交流できない留学生も多

い。日本人と交流したくても会話が苦手でなかなか一歩を踏み出せない留学生も多い。授業としてやれば、その一歩を踏み出しやすい。」、「１度はこのようなチャレンジをして、自分の力をよく理解できるようになる。日本語のコミュニケーションも良くできるようになる良い機会だと思う。」と答えている。この回答からも、出前授業を実施した意義は十分にあったとわかる。

８．おわりに

以上、留学生による出前授業に対する受講者と講師役の留学生による評価とインタビューを通して、当初、本取り組みの狙いとしていた「日本語能力の向上」、「本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに定める能力（基本的学習成果）の獲得・向上」は、ある程度達成されたことが確認できた。また、それ以外にも本学ビジネス総合学科のディプロマポリシーの専門的学習効果の獲得も副産物的に達成されたことがわかった。以上のことから、留学生による出前授業は、その効果をみても、異文化の相互理解だけでなく教育的有用性が期待できるものといえよう。

なお、本稿では、出前授業の受講者が得られる教育的効果については、アンケートによって明らかとなった「その国に対する理解の深化」以上のものを明らかにすることができなかった。講師役である留学生に対する教育的有用性だけでなく、受講者側のそれも同様に存在することが分かれば、留学生による出前授業の真価がより明確になるであろう。そのためには、引き続きこのような取り組みを行っていき、受講者側のそれを明らかにしていくべきであろう。

また、本取り組みの課題として、出前授業を実施する講師役の留学生が多国籍となってしまった場合の対応があげられる。この場合、「自国についての紹介」という留学生にとって比較的進行しやすいテーマを採用できなくなるため、授業内容の決定過程で多くの時間を要する可能性がある。また、恒松（2019）にもあるように、留学生が多国籍である場合、文化的背景の相違や言語障壁により留学生間の相互理解が円滑に行われず、連携や協働がうまくいかないケースも想定される。したがって、教員には状況に応じて合意形成を促すためのある程度のファシリテーションスキルが求められよう。

なお、残念ながら本学は、2025年度以降の学生募集を停止することが決定し、城西短期大学の留学生教育の一環としてこの取り組みを続けていくことはできなくなった（2024年度入学生に留学生がいなければ、短期大学としての本取り組みは今年度限りとなる。）。しかし、本稿で明らかにしたように、留学生が講師役となって出前授業を実施することの教育的有用性は高い。したがって、機会があれば、どこかでまたこのような取り組みを続け、留学生の成長を促していきたいと考えている。そして、その成果として今回の２名の留学生が懸念していた特定の国やその国の人々に対する過度な悪印象を解消し、我が国の共生社会の発展の一助となれば本望である。

5　なお、今年度入学した留学生は既出のとおり２名だけであったため、本学のMSOffice等を学ぶ演習科目である「コンピュータ演習」の留学生クラス（例年筆者担当科目）を開講できなかった。そのため、準備段階において、WordやPPT等の基本的なテクニックについて、本格的な演習にならぬよう、さり気なく教えながら作業を進めさせていた。その結果として、彼らがPPT技術の成長を感じているのであればしめたものである。

参考文献

1）木谷真紀子・高岸雅子（2019）「留学生の「京都」への貢献－交流、連携からの発展－」『同志社大学日本語・日本文化研究』（15）, 43－56.

2）キャサリン・シンプソン（2020）「島根大学留学生と地域との交流－その10年間の取り組みと成果－」『留学交流』（114）, 1－6.

3）岸田由美（2022）『外国人留学生と地域住民の交流の実態と大学・地域特性に関する調査研究』（2001[マ]8[マ]－2021年度科学研究費補助金　基盤研究（C）研究成果報告書　課題番号　18K02722）.

4）村越純子（2021）「小川町にぎわい創出課との連携による地域教育－留学生対象「日本文化研修Ⅰ」における学外授業」『地域と大学』（1）, 28－38.

5）木谷真紀子（2019）「留学生による「高大連携」と「地域貢献」－京都府立鴨沂高等学校の授業への留学生参加の試み－」『同志社大学学習支援・教育開発センター年報』（10）, 41－53.

6）恒松直美（2019）「多国籍留学生が体験学習から捉えた日本社会との接触における課題」『留学生教育』（24）, 11－21.

A Study of Educational Usefulness of Visiting Lectures by International Students

- A Case Study of Kirameki Citizen's College -

TABUCHI Takaaki

Key words : International Students, Visiting Lectures, Kirameki Citizen's College, Educational Usefulness

Abstract

In this paper, we use a case study of a delivery class in which international students acted as instructors to clarify what abilities international students developed through contact between them and local residents and through preparation for such contact. In addition, the educational usefulness of the delivery class by international students was examined by comparing the relationship between the delivery class by international students and their previous experiences with the local community and local residents. As a result, it was found that the delivery class by international students has educational usefulness as well as cross-cultural mutual understanding.